（教育・学習機会の充実－Ｎ－２）

人のつながりを生み出す「人生の聞き書き」
（伊丹市立伊丹高等学校）
http://sns.itamachi.jp/

〔概要〕

地域に生きる高齢者、若者、子どもたちが繋がるために、高齢者の方々の生き様を、若者や子どもたちが聞き取り、それを言葉にする活動を紹介します。

この活動によって、閉じこもりがちであった高齢者が地域のイベントに顔を出すようになり、高齢者の持つ生きる知恵が地域の活性化につながります。

伊丹市立伊丹高等学校では、「地域に根ざした活動で、若者が本気になれば、地域は活性化できる」実践として「伊丹育ち合い（共育）プロジェクト」を１１年間行っています。高齢者の人生が可視化されることで、生徒の自発性を生み出し、その意欲に触発された地域が変わっていく事例です。

〔コラム〕

地域 SNS を活用し、地域とのつながりを深めていった「伊丹育ち合い（共育）プロジェクト」において、２人の高校生が地域との連携をより深めるために企画したものです。この企画によって、多くの関係者を結びつけました。

関係者　・高齢者：K-メゾンときめき　入居者・通所者・施設関係者
・若者（中学生）：伊丹市立北中学校生
・若者の指導者：伊丹市立北中学校　教員・校長
伊丹市立伊丹高等学校　教員・校長
・書き方指導：地域情報化アドバイザー　坪田知己
・研究：関西学院大学　学生・教員（リサーチフェアで発表）
伊丹市立伊丹高等学校　３年生（高大連携として研究）

手順としては、①中学生が地域情報化アドバイザーの坪田知己さんの書き方講座を受講、②高齢者から中学生が「若い時の話」を聞き取り、③それを文章化し、④印刷製本、⑤中学生の手紙と冊子を高齢者に渡し、⑥効果について研究発表するというように、実践を丁寧につなぎ、効果をあげています。

効果としては、閉じこもりがちの高齢者が、エンディングノートではありませんが、自分の人生を若者に伝えることで、生き甲斐を見出し、生き生きと地域の行事に顔を出すようになってきました。若者にとっては、自分の祖父・祖母とは違った人生を知ることで、キャリア教育に繋がっています。

イベントを「する」から、「通じて得る」ものに変化した取り組みだといえます。この取り組みは、地域 SNS である「いたまち SNS」の働きによって支えています。地域 SNS によって、多様な人との情報のやり取りが可視化されることで、より広範囲な人のつながりを生み出すことを可能にしています。

（取組みイメージ図）

総合政策学部1回　猪崎真理子
市立伊丹高等学校3年　長橋千秋

聞き書き～若者と高齢者の貢献と得ること～

高校生徒がブリッジング

中学生と福祉施設にはたらきかけ、中学生が施設利用者の歩んできた人生を聞くという機会をつくった。

その生み出された空間がもたらした効果とは．．．

↑この二人が仕掛け人!!

↑可視化された紙

中学生：貢献できること
⇒高齢者：自分の再発見

私たち若者が高齢者の話を聞いて、語り手に貢献できるということは少ないと思っているのではないか。

今回聞き書きをした中学生は後日、語り手の話を一枚の紙にまとめて渡した。自分たち語り手が話したことが中学生を通して可視化されたことで、高齢者は新たな自分を発見した。

限られたコミュニティの中で生活する福祉施設では経験できない、世代を超えて交流することによって、また新しい生きがいを見つけた。

↑生まれる効果↓

高齢者：貢献できること
⇒中学生：人生を考える

中学生にとっては、自分の生き方を模索するこの時に、人生を自分の生き方で歩んできた語り手から、たくさんの人生の教訓を得る。

自分たちとはほとんど関わることのない世代であり、これまでの経験値もまるで違う。交流を通して刺激を受け、自分の人生を深く考えるきっかけを生む。

キャリア教育につながっていく。

～語り手の話～

Aさん・男性(77) 入居2年目

「楽しくいきたい」

⇒高校生に会いに行きたい

以前から妻と一緒に入居することを決めていた（息子に迷惑をかけたくない）。入居する以前と生活は変わりはしたが、妻と一緒にいる時間がほとんど。以前の生活に不満などはなく、今を楽しくいきたい。今は妻と散歩に出かけたり、漢文や歌や詩をアレンジすることを楽しんでいる。

Bさん・女性(82) 入居1年半

⇒自分の人生を語りたい

以前はOLで事務をしていた。中学生に聞き書きを行ったときは、何でも話したくなった。過去のことも現在のことも。現在は本を読むことが日課になっている。目がいいので苦にならない。外出もよくする。

Cさん・女性(74) 入居半年

⇒戦争体験を伝えたい

以前は鉄筋工をする旦那さんを支える専業主婦。毎日お弟子さんたちに出すご飯を、たくさん作っていた。聞き書きでは中学生という難しい年頃だが、とてもいい子だと思った。自分たちの戦争の体験を話すのは大丈夫だが、世界で起こっている紛争などの映像は見るのを躊躇う。現在の楽しみはおしゃべりと、外出。

語り手はこれまでの人生の中で、たくさんの経験をしてきた。しかしこの経験を今までどのように生かすことができたのだろうか。福祉施設に入ることによって、自分と向き合う時間が増えた。そして行動力あふれる若者の高校生が企画したこの聞き書きで、自分たちの経験を若者に話し、それが一つの生きがいだと気づく。そして語り手は話していく中で、こんなにも「人に伝えたいこと」があったのだとわかる。

自分の人生をこのまま静かに終わらせたくないという心の中の気持ちが、この聞き書きによって刺激された。

これは、関西学院大学で開催されたリサーチフェアで発表されたポスターです。
（特別賞を受賞）

〔問い合わせ先〕
伊丹市立伊丹高等学校　畑井克彦
TEL：072-772-2040 e-mail:hata3000@itami.ed.jp